

「灯台下暗し」よりも深刻に思える事

使用者委員 吉富 秀介

鹿児島に住んでいてよく聞く言葉の一つに「鹿児島(人)はPR下手だ」があります。

桜島をはじめとする、有史以前から形成されてきた火山帯が織りなす風景、そして近代日本の原動力となった歴史を感じる事ができる此処鹿児島は、他のどの県にも負けない魅力的な「設え」に恵まれています。更に食の美味しさでも人気を博しているのはご承知の通り。

それでも県外出身の方々は口々に「もっと情報発信を」とアドバイスを下さいます。

天文館の酒場で、観光でいらしていた方からこんなエピソードを伺いました。

曰く「明日訪ねようと思っていた所があるのだけど、迷っている」

というのも、その日タクシーの運転手さんと交わした会話が

(観光客)「明日、指宿の砂蒸し温泉に行こうかと思ってます」

(運転手)「いや〜、あんなつまらないところ行かなくて良いですよ〜」

だったそう。その場にいた皆が愕然としたのは言うまでもありません。

そしてその時ハッと思い当たりました。その運転手さんは「『謙遜』と『卑下』を混同している」のではないか?」ということです。

私たちの周りにも、物事をチョット斜めに見て面白おかしく語る人はいます。心地よく聞こえればユーモア、そうでなければ微妙ということでしょうか。謙虚に振る舞ったつもりが、卑下に聞こえたら、これほど勿体ないことはありません。(まあ、鹿児島の方言は他所の人にはキツク聞こえることもあるらしいです。謙遜したつもりが、その場所を悪く言っているように聞こえたということも十分考えられますが、それはそれで難題ですね。)

今は、地方にスポットライトが当たっている時代ではないでしょうか。各県ごとの独特の習慣を取り上げるテレビ番組も人気です。小学校時代に「標準語の発音教育」(ア・エ・イ・ウ・エ・オ・ア・オ!)を受けていた頃を思うと隔世の感がある、と言えば大袈裟でしょうか。時代の波もスピードを上げてやってくる昨今、「謙遜」したつもりの「卑下(に聞こえる言葉)」が、瞬く間に世界中に広がる、と考えると、「観光立県」を大切だと考える我々は言葉遣いひとつから気を配ることを覚えなければならないと思う次第です。

観光に大きな役割を果たしている筈の、タクシーの運転手さんが何気なく放った言葉が観光客を戸惑わせたとしたら、「鹿児島の人こそもっと鹿児島の良さを知って、アピールしましょう」どころではない訳です。

ところで、自分の話した言葉が人様にどう伝わるのか、は観光に限らずどんな場面でも難しいテーマであることは言うに待ちません。相手がどう思うか、理解してくれるのかを考えて経営にも取り組みたいと考えます。